

しょうけい館 ー 戦傷病者史料館 ー
移転整備 設計内容について

令和5年3月

しょうけい館

I. 移転先施設について（前回報告分 抜粋）	3
II. 展示空間について（前回報告分 抜粋）	6
III. 展示構成について	17

I. 移転先施設について（前回報告分 抜粋）

I. 移転先施設

1. 施設概要

■建物名称

グリーンオーク九段

■所在地

東京都千代田区九段北1-11-5

■規模

地上8階 地下1階建 (入居階：2・3階)

■延床面積

約3,400㎡ (入居階1フロアあたりの床面積：約350㎡)

■アクセス

九段下駅 徒歩 約3分 ・ 飯田橋駅 徒歩 約7分

1F：エントランス



1F：エントランスホール



1F：エレベーターホール



グリーンオーク九段



・ 3階
・ 2階

I. 移転先施設

2. 立地・入居条件

■ 移転先立地について

九段下駅徒歩3分ほどで、アクセスできる便利な立地。
目白通り角地に立地しているため、視認性も良好である。

■ 沿線・最寄駅からの距離

東京メトロ半蔵門線「九段下」駅より 徒歩3分
JR中央・総武線「飯田橋」駅より 徒歩7分
都営新宿線「神保町」駅より 徒歩7分

■ 現しょうけい館の立地の比較

九段下駅の出口からの距離は、現施設よりも若干遠くはなるが、徒歩3分という距離であるため、駅の近隣に位置している。
そして大通りに面しているため、建物の入口も通りから視認でき、外部への看板などを設置した際も視認性が向上している。

■ 入居に伴う要求条件

- ・ 事務所仕様から博物館として使用するための、建物の用途変更を実施
 - ・ 博物館としての設備要件の付与 (例) バリアフリー対応等
 - ・ 土日祝日の開館に伴う、1階エントランスの開放
 - ・ 不特定多数の訪問者の出入りの許可
- ※ 貸主との合意要件より抜粋



II. 展示空間について（前回報告分 抜粋）

II. 展示空間について_前回のふりかえり

2. 空間デザイン/2階

1) 鳥瞰イメージ



※①～②：次ページ目線パースアングル位置

II. 展示空間について_前回のふりかえり

2. 空間デザイン/2階

2) 目線イメージ①

EVホールから受付・エントランスホール方向を望む



II. 展示空間について_前回のふりかえり

2. 空間デザイン/2階

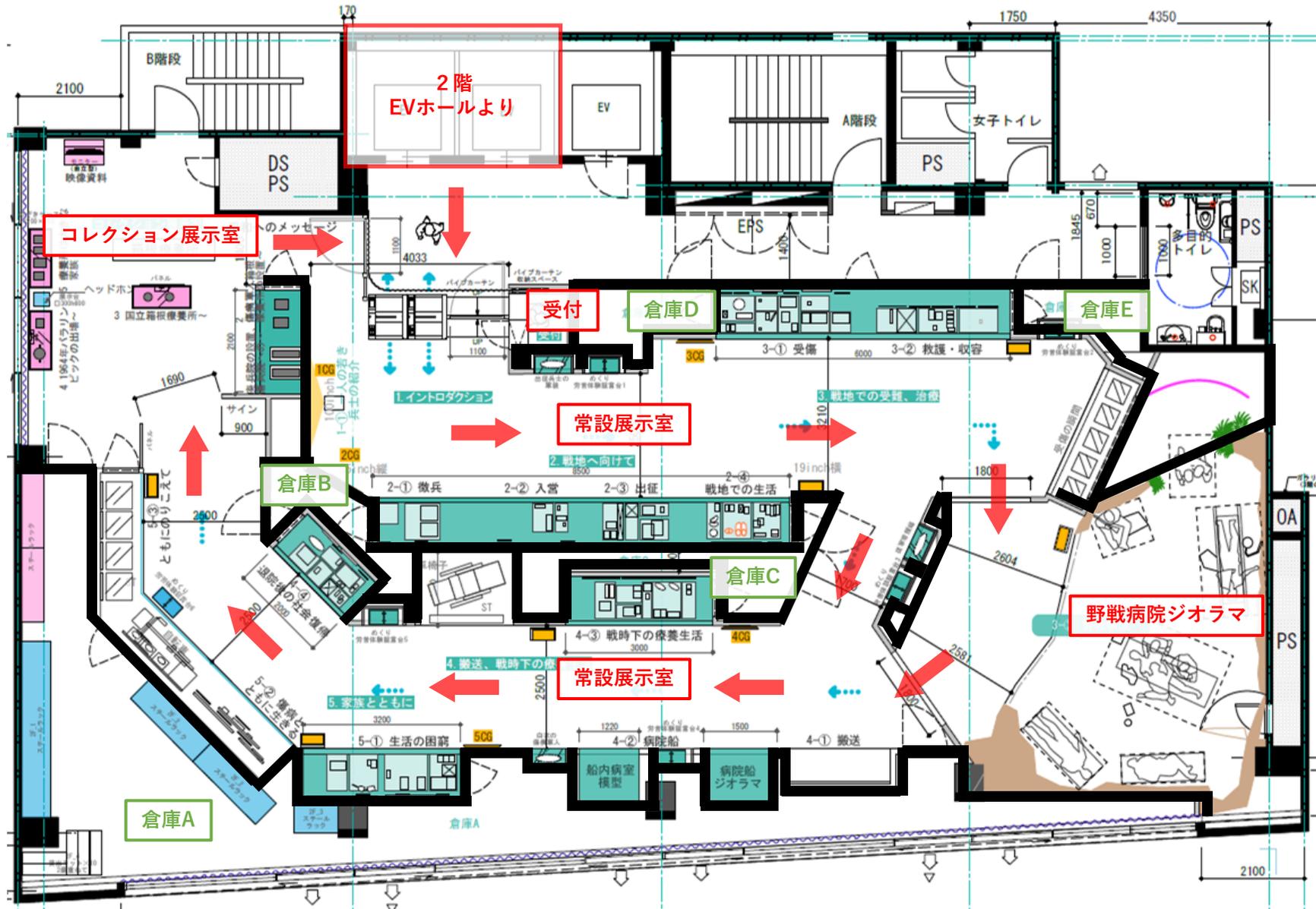
2) 目線イメージ②

エントランスホールから企画展示室方向を望む



II. 展示空間について_前回のふりかえり

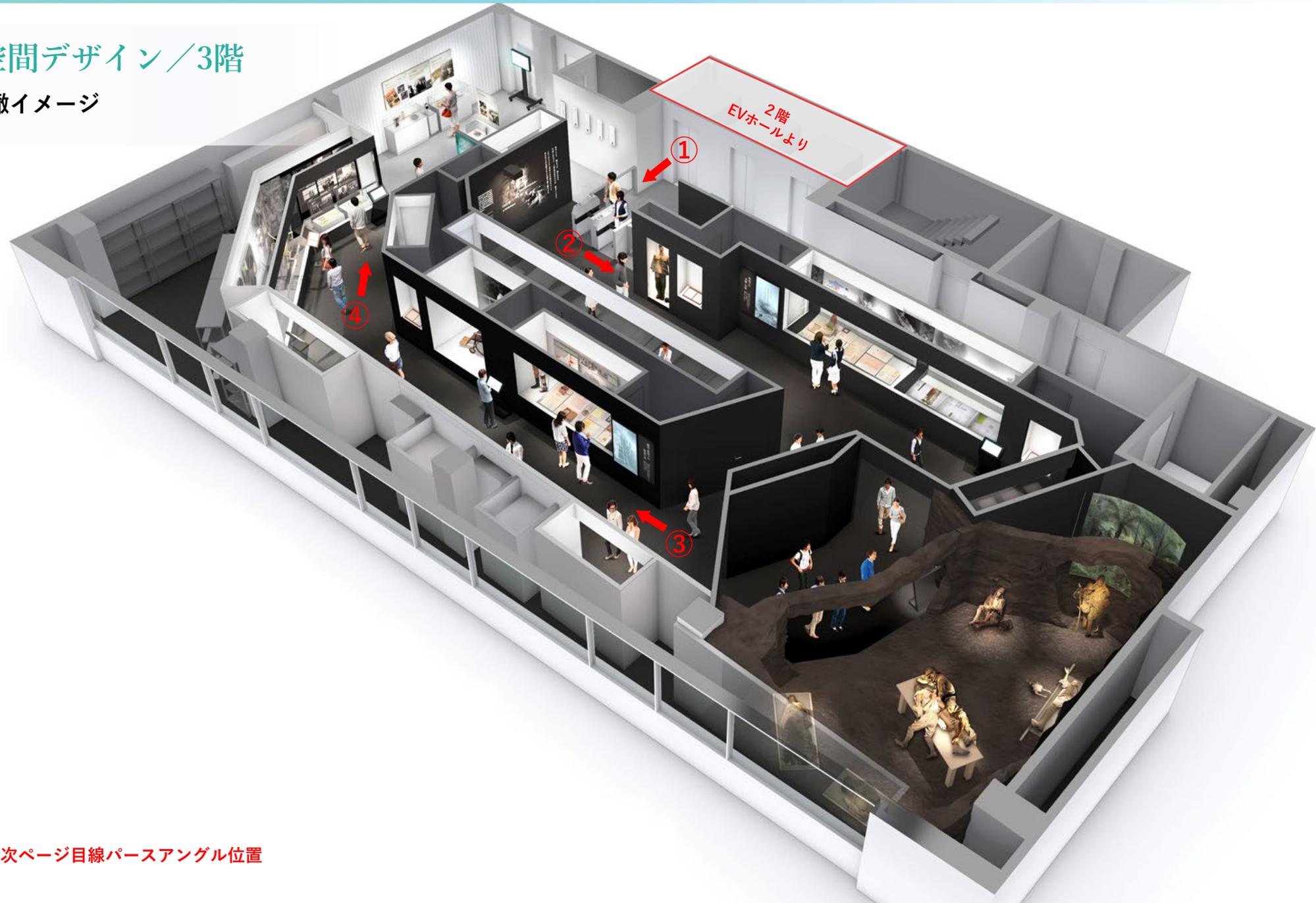
3. 諸室配置 / 3階 358.18 m² 天井高2500mm



II. 展示空間について_前回のふりかえり

4. 空間デザイン／3階

1) 鳥瞰イメージ



※①～④：次ページ目線パースアングル位置

II. 展示空間について_前回のふりかえり

4. 空間デザイン／3階

2) 目線イメージ①

EVホールから常設展示入口を望む



II. 展示空間について_前回のふりかえり

4. 空間デザイン／3階

2) 目線イメージ②

展示室入口から野戦病院ジオラマ方向を望む



II. 展示空間について_前回のふりかえり

4. 空間デザイン／3階

2) 視線イメージ③

野戦病院ジオラマから展示室戦後のコーナーを望む



II. 展示空間について_前回のふりかえり

4. 空間デザイン/3階

2) 目線イメージ④

戦後のコーナーからコレクション展示室を望む



Ⅲ. 展示構成について

Ⅲ.展示構成について_前回のふりかえり

1. 移転にあたっての展示の方向性について

展示計画 基本方針

- 1) 若者世代に伝わる展示
- 2) 所蔵資料を十分に活用できる展示
- 3) リアルとバーチャルを機能的に組み合わせた展示手法の開発

展示変更のポイント

コーナー分類（展示構成）の再構成

先の大戦に関する情報を持たない来館者でも理解しやすいコーナー分けとコーナー名称等へ変更する。

映像で伝えるイントロダクション・コーナーガイダンス・選択型解説ディスプレイの設置

常設展示の始まりに先の大戦の概要を伝えるイントロダクション、各コーナーの始まりにコーナー概要を伝えるコーナーガイダンス、各コーナーの最後に、来館者が求める情報を提供する選択型解説ディスプレイを設置し、展示の理解を促進する。

団体へのオリエンテーションの強化（2階多目的プレゼンテーション室）

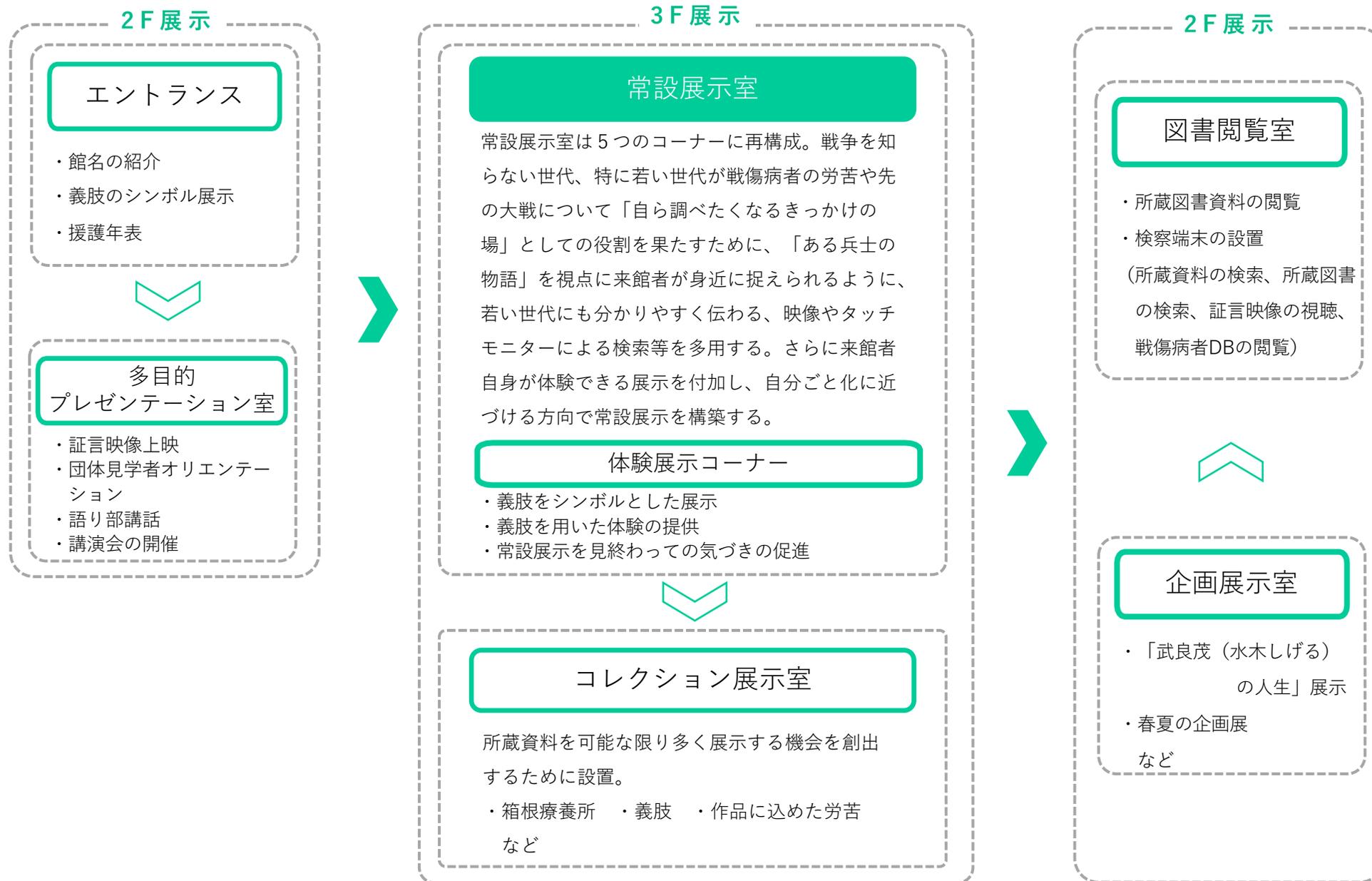
先の大戦や、戦後の社会に関する基本的な情報を習得していない中高生などの団体向けに、本展示の概要とともに先の大戦を中心とする情報を、映像を通して、より詳細に伝える。

コレクション展示室の新設

所蔵資料をより有効的に活用するために、常設展や企画展の構成を再検討するとともに、テーマを設けた展示コーナーを新設し、年に2～3回展示替えを行う。

III. 展示構成について

2. 全体展示概要（展示体験のながれ）



III. 展示構成について

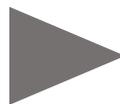
3. コンテンツ種類（場所）ごとの役割

■ 来館者ターゲットの拡大

今まで多かった戦争経験者・関係者に加え、若い世代の来館者にも戦争や戦傷病者・その家族の労苦を知り学んでもらいたい。



難しい内容でも構えてしまうことのないよう、興味・関心を刺激するフックとなり、自分ごととして考えるきっかけとなるコンテンツ展開を行う。



■ コンテンツコンセプト

- ・今を生きる様々な世代の人々に、戦争や戦傷病者について考えてもらうためのきっかけとして、また他人事ではなく身近な問題として捉えやすくするための案内人として、現在の展示にもある「ある兵士」のストーリーをガイドラインとすることで、わかりやすく展示を進めるようにする。
- ・各コーナーガイダンスの映像と合わせて、これから体験する展示内容をより身近に感じてもらう。

展示体験の中での各コンテンツの役割

通常見学

◇ 3Fイントロダクション映像- Story:0

戦争は決して「昔のこと・遠い国のこと」ではなく、いつ自分たちの身に起こっても不思議ではないことを感じてもらい、戦傷病者の労苦を自分ごととして捉えてもらうための映像。

◇ 3F各展示コーナーガイダンス映像- Story:1~4

展示のガイダンス映像として「ある兵士」がそれぞれの局面で何を経験し、何を思ったのかを文字とシルエットで表現。
展示品と合わせ、実際の兵士たちが抱いた不安や葛藤、多くの苦難を実感してもらうための映像。

◇ 3F各展示（リアル）+音声ガイド

◇ 各コーナーの選択型モニター

表示されたメニューから選択して「静止画と文字解説」を閲覧することで、より深い情報にアクセスできるようにする。

団体見学

◇ イントロダクション映像- Story:0+ 2F団体向けガイダンス映像

3Fイントロダクション映像の上映後、学芸員の解説を補足するため先の大戦の概略を解説する映像。

「ある兵士」のストーリーを追体験することで戦争や戦傷病者・その家族の労苦を他人事ではなく、自分ごととして捉え展示物や実際の証言記録などをよりリアルに感じ取れるようにするコンテンツ構成

◇ ポケット学芸員アプリ・HP・各種SNS（スマートフォン・PC）

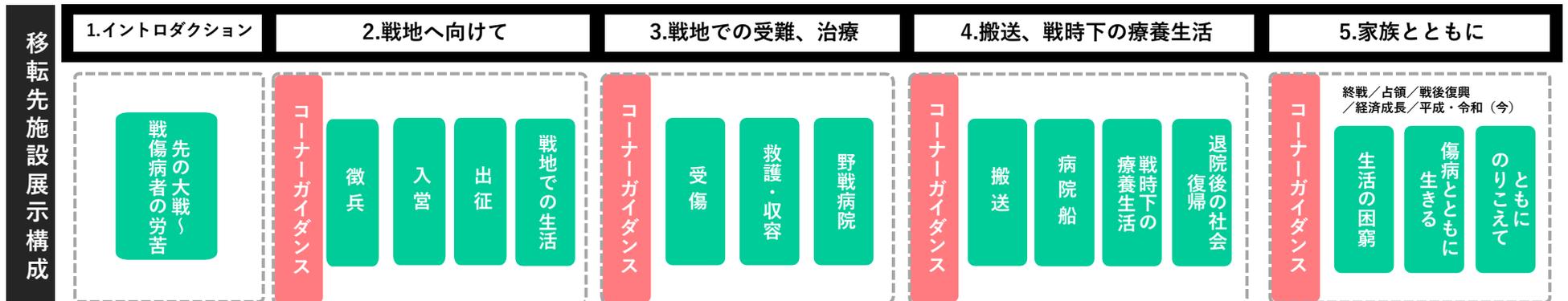
事前学習や振り返りのために、館の案内や最新情報、展示内容や展示資料まで、館の様々な情報を提供する。

III. 展示構成について

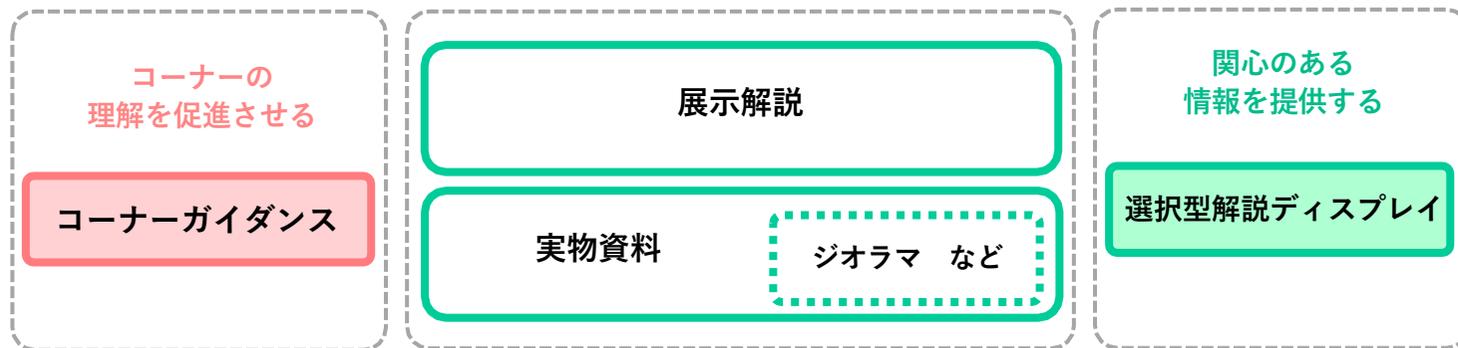
4. 常設展示室 基本構成



■ 展示内容構成



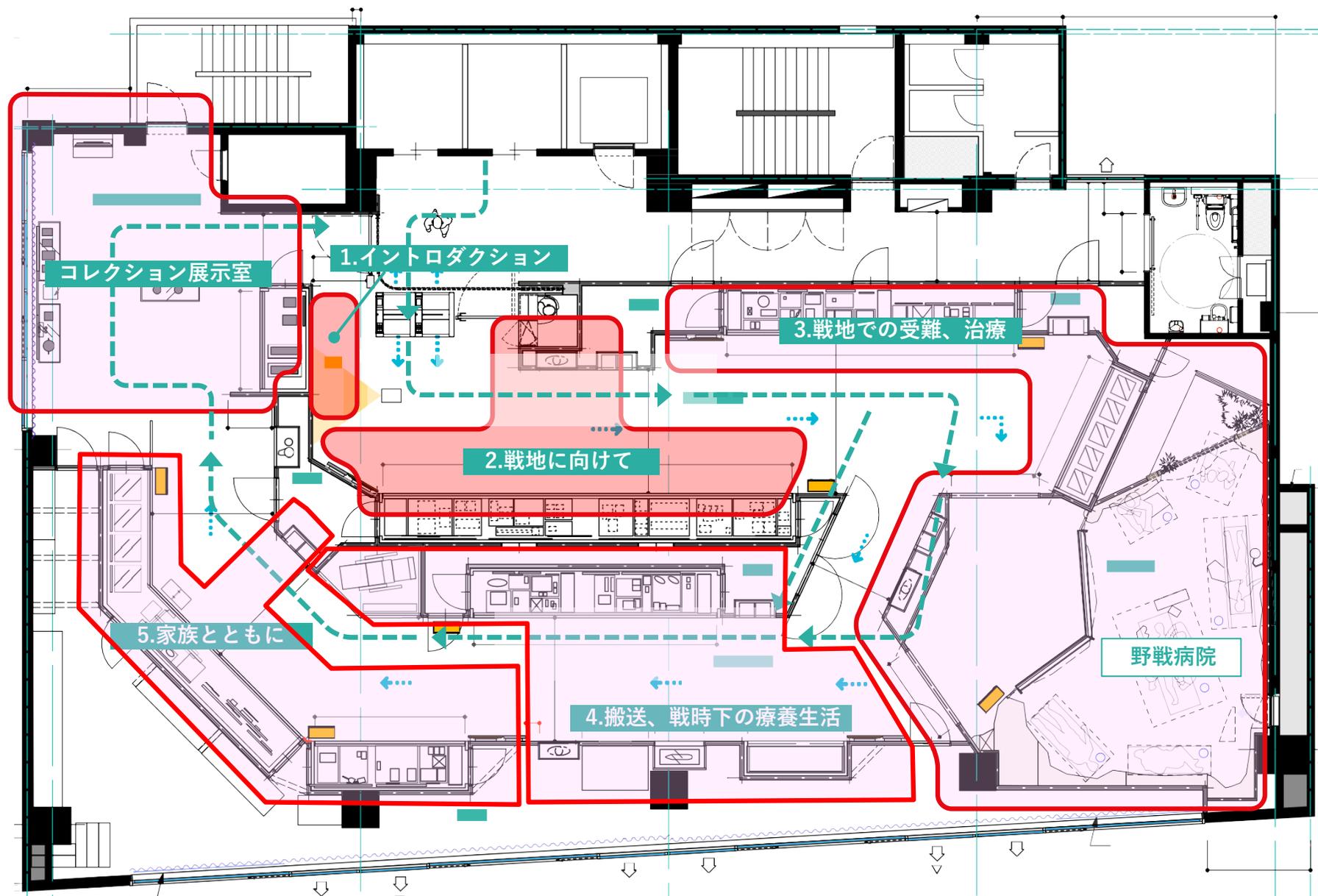
■ 展示手法構成（各コーナーでの構成）



III. 展示構成について

5. 常設展示室 全体コーナーについて

■ 各コーナー配置

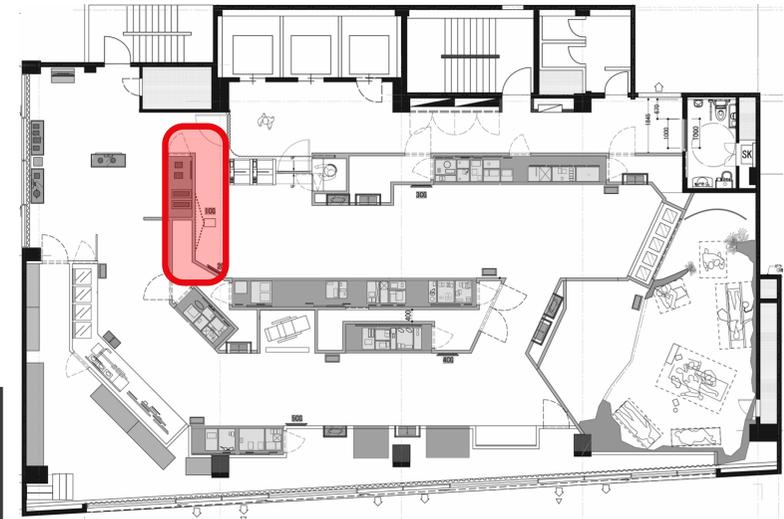


Ⅲ. 展示構成について

6. 常設展示室 コーナー展開：「イントロダクション」

■ 展示手法

- 100インチ程度の大型画面表示
- 映像は、2分程度 ループ映像（音声無し）



導入解説・年表

館からのメッセージ



Ⅲ.展示構成について

6. 常設展示室 コーナー展開「イントロダクション」

6-1. イントロダクション映像構成

【コンセプト】

- ・日本に生きる現代の私たちにとって、戦争はそれ程身近なものではない。特に中高生にとっては、自分とは別の世界の「昔のこと・遠い国のこと」と感じていると思われるが、戦争はいつ自分たちの身に起こっても不思議ではないことを感じてもらい、戦傷病者の経験と労苦を**自分ごととして捉えてもらうための映像**。

【概要】

- ・今を生きる人々に、戦争や戦傷病者について考えてもらうためのきっかけとして、身近な問題として捉えやすくする案内人となる「ある兵士」を登場させ、各コーナーガイダンスの映像と合わせて、これから体験する展示内容をより身近に感じてもらう。

【演出プラン】

- ・現代の街の風景、そこにいる見学者と等身大の日本の若者が、ウクライナなどの戦争情報から戦争に想いを馳せる姿を見せ、世界では**今もどこかで戦争が行われているのを改めて感じてもらう**。
そして、街を行き来する若者を「先の戦争」に参加していく兵士と重ね合わせ、見学者に戦争を「**自分ごと**」としてもらうと同時に、「ある兵士」のストーリーを**追体験する導入とする**。

【映像構成】

- ・東京の街と、街を行き交う若者たち。
若者がスマホでネットニュースを見ると、戦争について報道がされている。
そして、モノローグで語られる若者の戦争への心情。
「先の大戦」の状況に映像が変わると、実際に参加した当時の日本の若者がどのような体験をしたのかを、より身近に感じられるようにするためのストーリーテラーとして「ある兵士」のモノローグがはじまる。

III. 展示構成について

6. 常設展示室 コーナー展開「イントロダクション」

6-1. イントロダクション映像構成

【シナリオ案／約2分】

- ・多くの人々が行き交う街…。
男子高校生Aが待ち合わせの場所で友人を待ちながら人々の流れを見つめている。

A (モノローグ)

「友人との待ち合わせで、久々にやってきた街…。
この街には、幸せを求めて多くの人たちがやってくる…」

- ・待っている間、スマホで、ネットニュースを見るA。
ちょうどウクライナでの戦争勃発が伝えられている。

A (モノローグ)

「…戦争…始まったんだ…」

- ・スマホから顔を上げると笑顔の若者たちが通りすぎていく…。

A (モノローグ)

「…僕たちがこうしてる今、世界ではさまざまな戦争が起きている…。
そこには、僕らと同世代の若者たちもいるはずだ…」

- ・インサートする世界地図のCG。
歴史に刻まれる様々な紛争が地図上に描写される。

A (モノローグ)

「…自分の国が戦争する…自分が兵士となって戦う…。
もし、そうなったら、僕はどんな体験をし、何を思うのだろう…」

- ・Aの目の前を流れていく人々の足元が、
太平洋戦争時に戦地で行軍する日本軍兵士の足元に切り変わる。

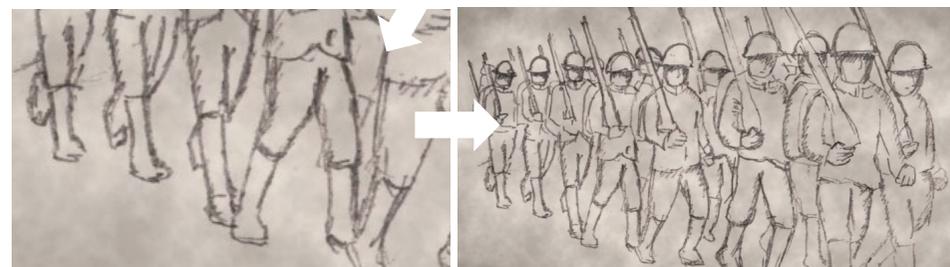
- ・行軍する日本軍の映像が、
銃器を持って突撃する何人かの日本軍兵士のシルエット映像に移り変わる。
そのうちの一人にカメラが近づいていき…。
「ある兵士」のモノローグが聞こえてくる。

ある兵士 (モノローグ)

「1941年、昭和16年…。
かつて、この国は「戦争」に勝つために、多くの若者を戦地へ送り出していた…。
当時20歳の私もその一人になろうとしていた…」

END

※イントロダクション映像を、あえてここで終了とすることで、
各コーナーガイダンスで語られる「ある兵士」のストーリーへの興味喚起を促す。

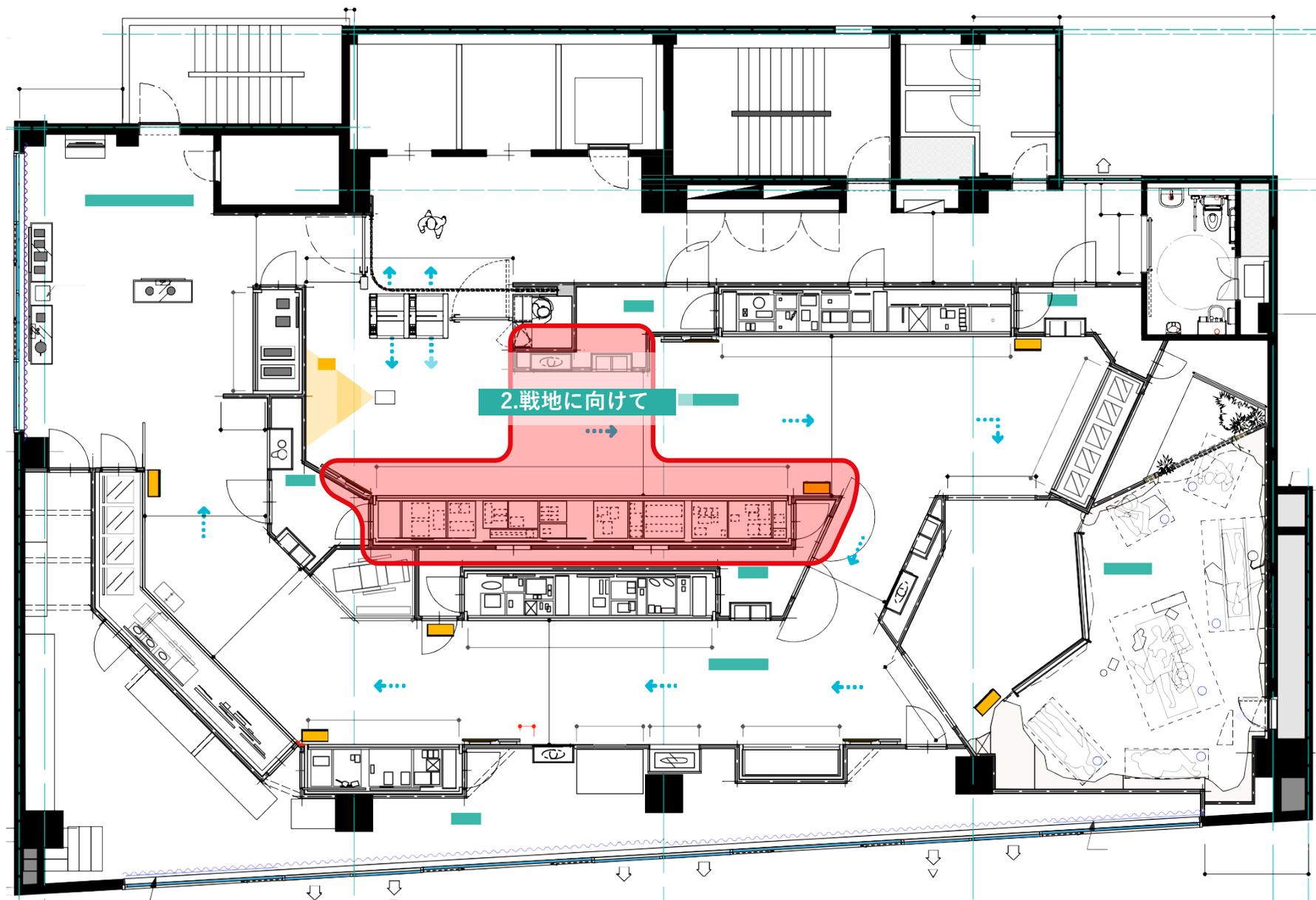


※戦時中の記録動画予定

Ⅲ. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開：「戦地に向けて」

■ コーナー位置



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開：「戦地に向けて」

7-1. 展示コーナーの基本構成

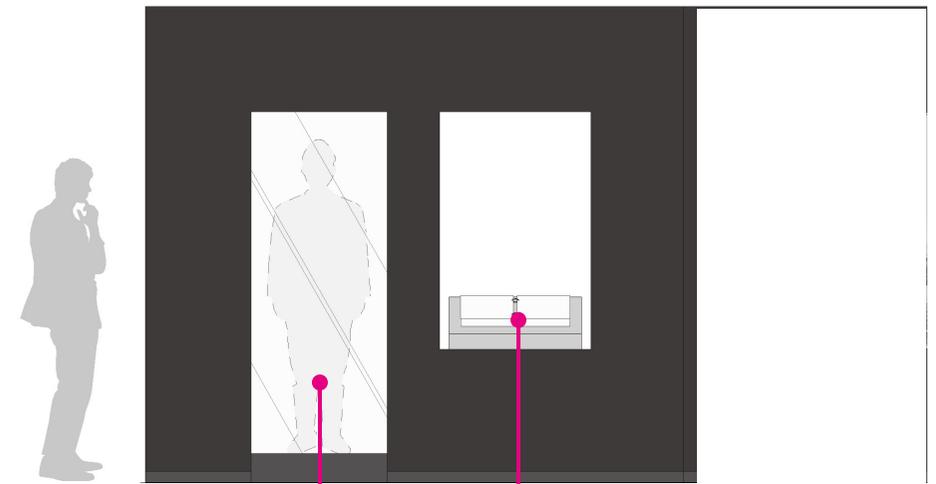
■ コーナー展示立面



① コーナーガイダンス
55インチモニター

③ 選択型解説ディスプレイ
24インチタッチモニター

② 展示ケース



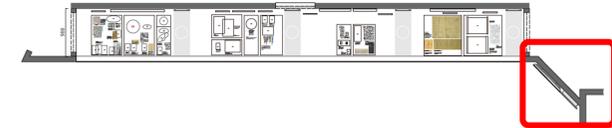
⑤ 軍装品 ④ めくり証言台

III. 展示構成について

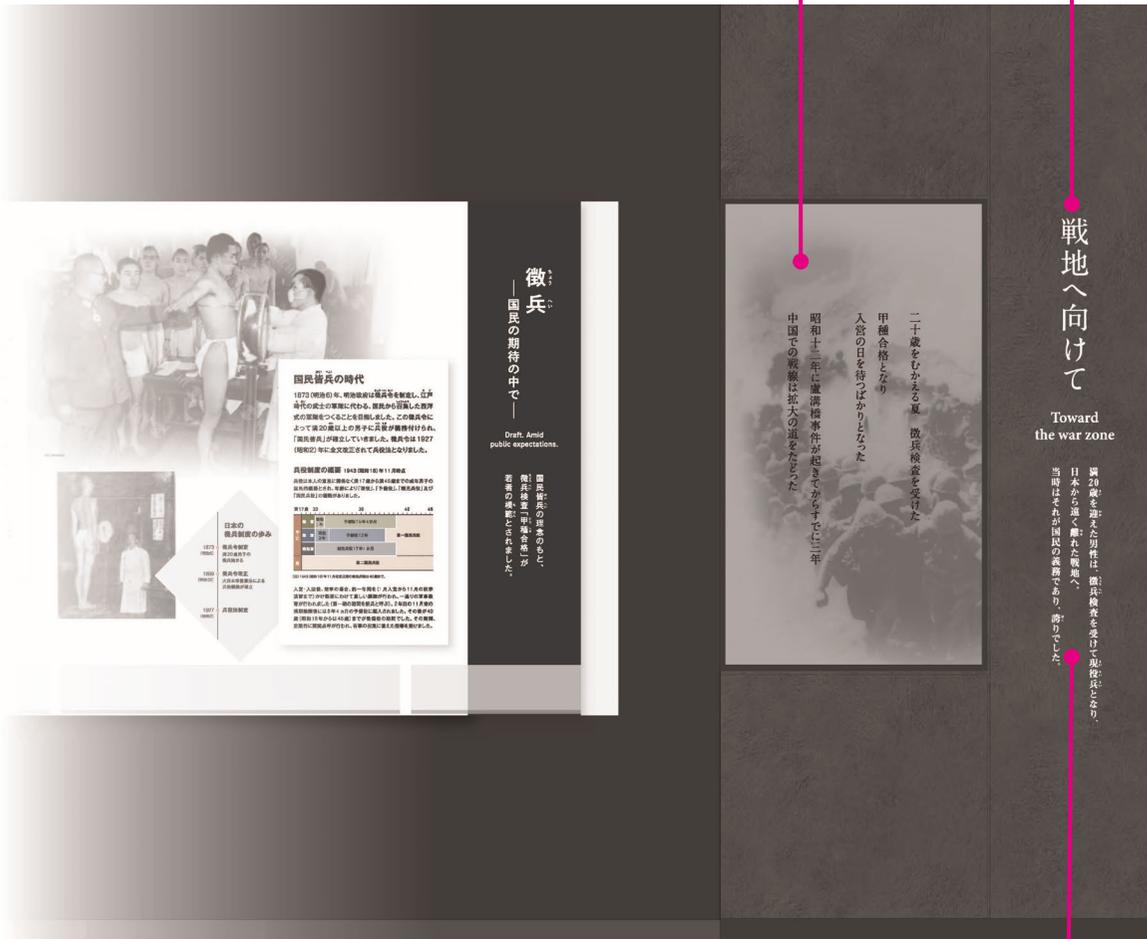
7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-2. コーナーガイドンス概要

■ 展開例（2. 戦地に向けて）



大型ディスプレイ コーナータイトル



コーナー概要

提供情報

- 各コーナーに関わる「ある兵士の手記」

展示手法

- 55インチディスプレイ
- 各コーナーの初めに1台設置
- 60秒程度のループ映像（音声無し）

Ⅲ. 展示映像コンテンツ

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-3. コーナーガイダンス映像構成

【コンセプト】

- 各コーナーの最初に、展示のガイダンス映像として「ある兵士」がそれぞれの局面で何を経験し、何を思ったのかを**文字とシルエットで表現**し、実際の兵士たちが抱いた不安や葛藤、多くの苦難を表すことで、**展示物を実感を伴いよりリアルに感じてもらう補助**とする映像。

【概要】

- 縦型モニターに、コーナーの展示内容に合わせ「ある兵士」が体験した、徴兵から戦地へ、戦地での戦闘と受傷、野戦病院と内地帰還、社会復帰で抱いた思いを文字で表示し、画像を背景に「ある兵士」のシルエットが登場し語っているように見せる。

【演出プラン】

- 実写背景と静止画シルエットを組み合わせた印象的なビジュアルで展開。
モノトーン風のシンプルなカラーリングで館内のイメージに合った格調高いガイダンス映像を演出する。

「ある兵士」は常にシルエット画像として登場



縦書きの「ある兵士」独白テキスト

背景の景色（雲やジャングルの植物など）は実写（写真及び動画）を使用。（ゆっくりと動いている）

仲間の兵士や兵器なども静止画シルエットとして登場させ、それらを各々別レイヤーにして動かすことで画面に奥行きをつける。

III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-3. コーナーガイダンス映像構成

■ コーナー2 ガイダンス概要

展示項目	概要
コーナーガイダンス① 2.戦地に向けて	徴兵から入営、出征、戦地での生活の様子を紹介する。 ある兵士の手記「二十歳をむかえる夏、徴兵検査を受けた。甲種合格となり入営の日を待つばかりとなった。戦地に派遣されると、日本での生活とは異なる過酷な日々が続いた。昼はジャングルに潜み、夜は道なき道をゆく、もう何ヶ月も満足に食べていない」等。

■ コーナー2 表示テキスト（案）

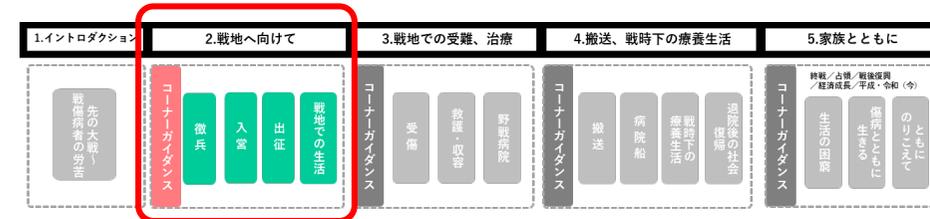
【表示テキスト／各コーナー約1分】

対応コーナー	表示テキストイメージ
コーナーガイダンス① 【生い立ち～徴兵】	わたしは農家の三男として生まれ、将来は都会に出て働くことになると思っていた。 二十歳となった昭和十六年夏、徴兵検査を受け甲種合格となり、陸軍へと入営することとなった。
【入営】	入営した陸軍では、同期の兵士らと歩兵として厳しい訓練を受けることとなった。 やがてどこかの戦地へと出征する不安と戦う日々であった。
【出征】	ついに戦地へと出征することになる。 大勢の兵士を乗せた汽車から降りると、船に乗せられた。南方の島へ送られるようだ。 どんなところなのだろうか、生きて戻れるだろうか…
【戦地での生活】	戦地では過酷な日々が続いた。 昼はジャングルに潜み、夜は道なき道をゆく、もう何ヶ月も満足に食べていない…

III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-4. 展示項目と概要



展示項目	概要
徴兵	<p>徴兵検査の写真、甲種合格の表彰状、などの資料を展示し、本人にとっての徴兵検査の意味合い、世間の甲種合格の受け止め方等を感じてもらう。</p> <p>「徴兵検査の概要」、「徴兵検査受検人員と現役徴集兵の割合」等の解説を通して、大戦末期には徴兵検査の年齢や基準が引き下げられ、徴集人数が増えていったことなどを知ってもらう。</p>
入営	<p>入営時の記念写真や、寄せ書きの入った日章旗、銭別帳、等の資料を展示し、普通の暮らしから軍隊へ入っていく様子や、日記等の資料を通して軍隊生活の様子を感じてもらう。「兵役制度の概要」（兵役期間）、「軍隊の兵種」等の解説を通して、軍隊組織の概要や、戦時体制下で臨時召集される予備役等の概要を知ってもらう。</p>
出征	<p>出征兵士を見送る写真や、遺言状、遺髪（爪）、千人針、などの資料を展示し、兵士として戦地に向かう様子や、覚悟を決めた本人の思いを感じてもらう。</p> <p>「徴兵・志願兵・召集兵数」、軍服・装備品等の解説を通して、出征時の状況を知ってもらう。</p>
戦地での生活	<p>戦地の様子を記した日記や写真、軍事郵便葉書、ヤシの実の水筒等の資料を展示し、食料や水の確保の厳しさや、内地とつながる手紙や慰問袋が兵士たちの慰めであったことを感じてもらう。</p> <p>「陸海軍の兵種と役割」、日本軍の最大進出域（地図）などの解説を通して、戦域の拡大、日本からの距離などを知ってもらう。</p>

III. 展示構成について

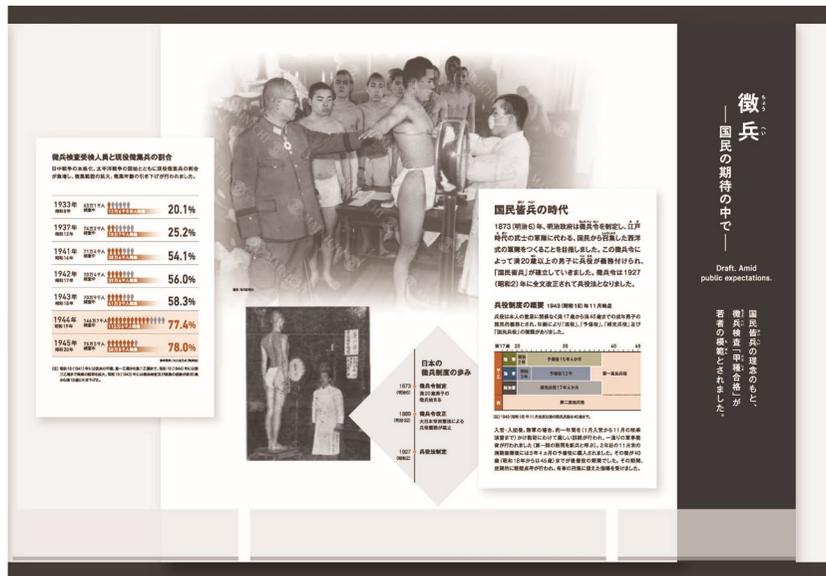
7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-5. 「徴兵」展示展開

■ 展示概要

徴兵検査の写真、検査通知書、甲種合格の表彰状などを展示し、徴兵検査の概要や、世間の甲種合格の受け止め方などを感じてもらう。徴兵検査の概要（陸軍身体検査規則）、「徴兵検査受検人員と現役徴集兵の割合」などを通して、大戦末期には徴兵検査の年齢や基準が引き下げられ、徴集人数が増えていったことなどを知ってもらう。

■ 展示展開



展示構成



立面・平面



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-6. 「入営」展示展開

■ 展示概要

現役兵證書（入営命令）、寄せ書きの入った旗、銭別帳など、無事を祈る家族の気持ちを伝える資料や、生活の様子を記した日誌、軍から支給された装備品などを展示し、軍隊生活について感じてもらう。

「兵役制度の概要」（兵役期間）、徴兵区の図、「軍隊の編成」などを通して、軍隊組織の概要や、現役兵だけでなく、戦時体制下で臨時召集される予備役、第二国民兵役等の兵役の概要も知ってもらう。

■ 展示展開



W19-H201 (黒)
W19-H202 (黒)

W48-H220 (黒)

W48-H200 (黒)

W75-H220 (黒)
W50-H203 (黒)

展示構成



立面・平面



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開 「戦地に向けて」

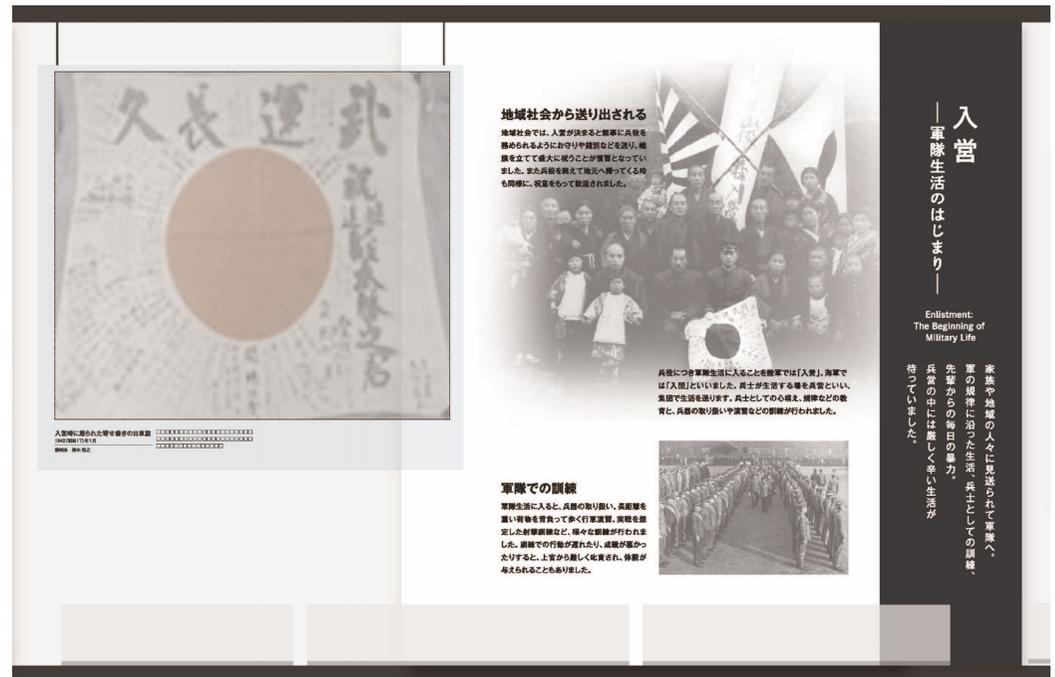
7-6. 「入営」展示展開

■ 展示項目

- ・ 地域社会から送り出される
- ・ 入営、入団について
- ・ 軍隊での訓練

■ 展示資料

- ・ 入営時に贈られた日章旗
- ・ 鉢巻
- ・ 祝入営饞別帳
- ・ 従軍日誌
- ・ 軍隊生活の様子が描かれた絵葉書
- ・ 軍から支給された装備品



W490+H220 (新)
W490+H500 (新)

W485+H220 (新)

W480+H500 (新)

W875+H220 (新)
W650+H500 (新)

III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

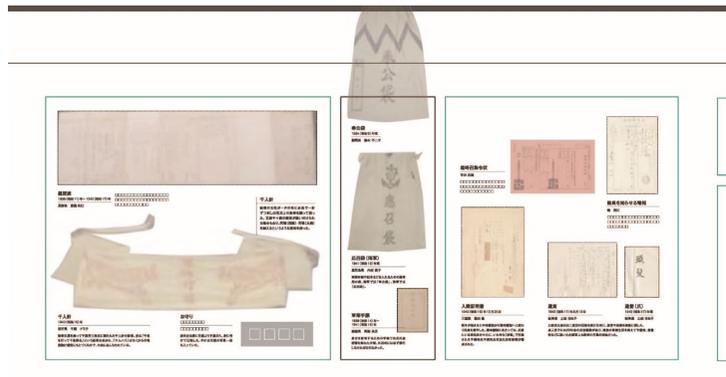
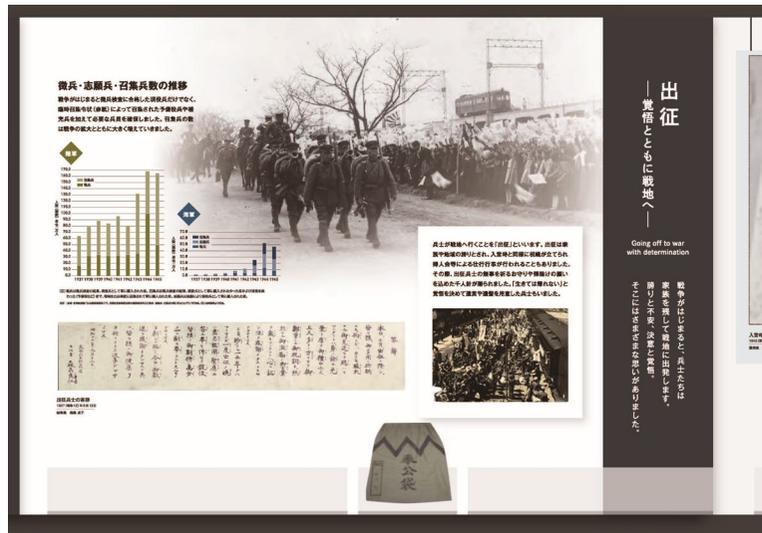
7-7. 「出征」展示展開

■ 展示概要

出征兵士を見送る写真や、入隊証明書、臨時召集令状、遺言状、遺髪（爪）、千人針、奉公袋、軍隊手帳、履歴表などを展示し、戦地に向うための準備の様子や、覚悟を決めた本人の思いを感じてもらおう。

徴兵・志願兵・召集兵数の推移のグラフや、軍服・装備品の解説などを通して、出征時の状況を知ってもらおう。

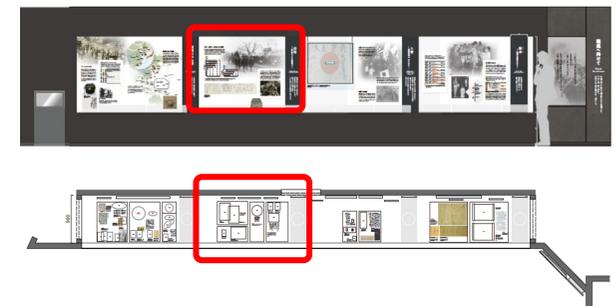
■ 展示展開



展示構成



立面・平面



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開 「戦地に向けて」

7-7. 「出征」 展示展開

■ 展示項目

- ・ 出征、見送りの解説
- ・ 徴兵・志願兵・召集兵数の推移

■ 展示資料

- ・ 臨時召集令状
- ・ 出征時の答辞
- ・ 遺言
- ・ 遺髪（爪）
- ・ 軍隊手帳
- ・ 履歴表
- ・ 千人針
- ・ お守り
- ・ 奉公袋
- ・ 応召袋

徴兵・志願兵・召集兵数の推移
戦争がはじまると徴兵制度に代わった徴召兵だけでなく、臨時召集令状（赤紙）によって召集された予備役兵や補充兵を加えて必要な兵員を確保しました。召集兵の数は戦争の拡大とともに大きく増えていきました。

出征
兵士が戦場へ行くことを「出征」といいます。出征は旅費や食料の確保と並んで、入隊時に義務が立てられ、個人や家族による送別が行われることもありました。その際、出征兵士の家族を守るための準備が重要な役割を果たしました。兵士は「千人針」を身に付け、戦場から無事帰国することを祈りました。

千人針
出征する兵士の家族が、兵士の無事帰国を祈るために身に付ける針です。針の針先には「千人針」と書かれ、針の柄には「出征」と書かれます。針の柄には、出征する兵士の名前や家族の名前が記されています。

出征時の答辞
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

遺言
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

遺髪（爪）
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

奉公袋
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

応召袋
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

千人針
出征する兵士の家族が、兵士の無事帰国を祈るために身に付ける針です。針の針先には「千人針」と書かれ、針の柄には「出征」と書かれます。針の柄には、出征する兵士の名前や家族の名前が記されています。

出征時の答辞
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

遺言
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

遺髪（爪）
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

奉公袋
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

応召袋
出征する兵士が家族に対して述べる言葉です。家族への感謝や戦場での決意が記されています。

出征
戦争がはじまると、兵士たちは家族を残して戦地へ出陣します。そこにはさまざまな思いがありました。

Going off to war with determination

戦争がはじまると、兵士たちは家族を残して戦地へ出陣します。そこにはさまざまな思いがありました。

W620-H1750 (新)

W270-H1750

W670-H1750 (新)

III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」 7-8. 「戦地での生活」展示展開

■ 展示概要

日記、戦地での生活の様子や、慰問袋に喜ぶ兵士たちの写真、家族にあてた軍事郵便葉書、防蚊手袋、ヤシの実の水筒、飯盒などを通して、食料水確保や、戦地の環境の厳しさ、そうした生活の中で内地とつながる手紙や慰問袋が慰めだったことなどを感じてもらう。

陸海軍の兵種と役割、兵士たちの生活の解説、地図（日本軍の最大進出域、主要な戦場）などを通して、戦域が拡大していったことや、日本からの距離を知ってもらう。

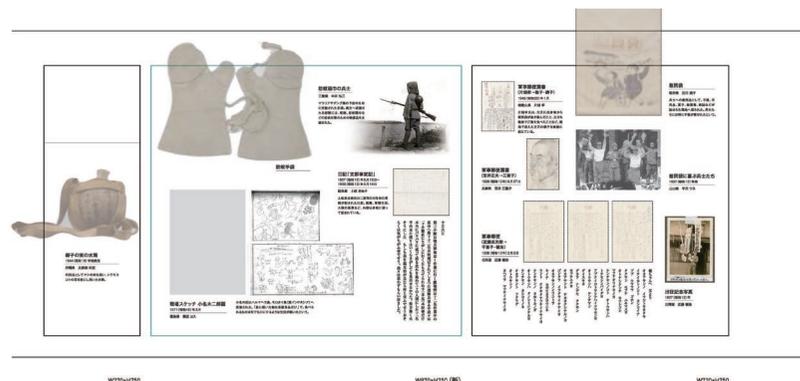
■ 展示展開



展示構成



立面・平面



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

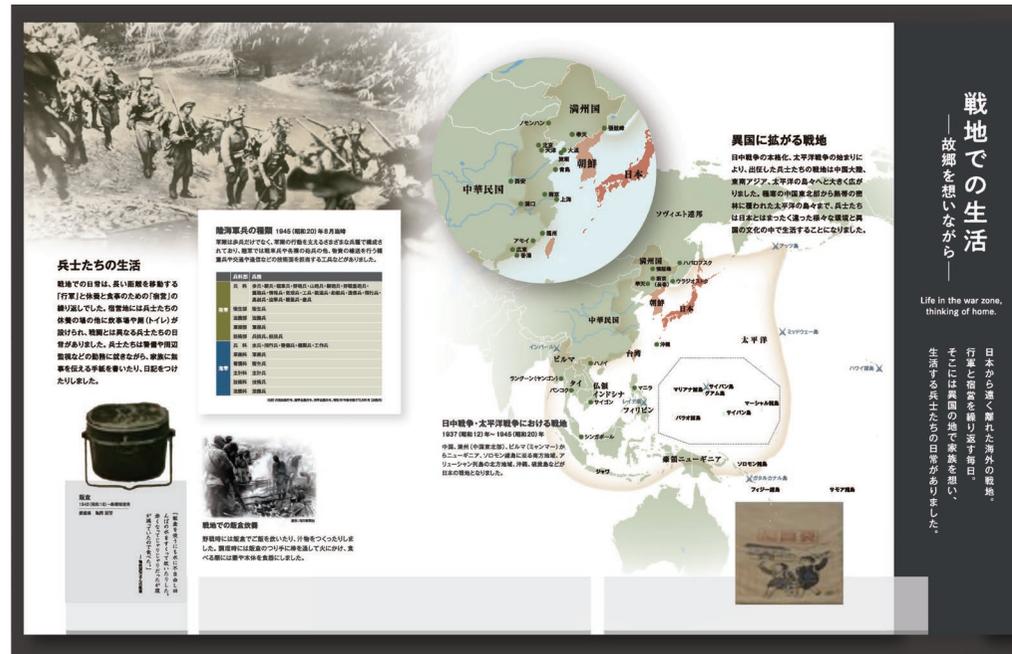
7-8. 「戦地での生活」展示展開

■ 展示項目

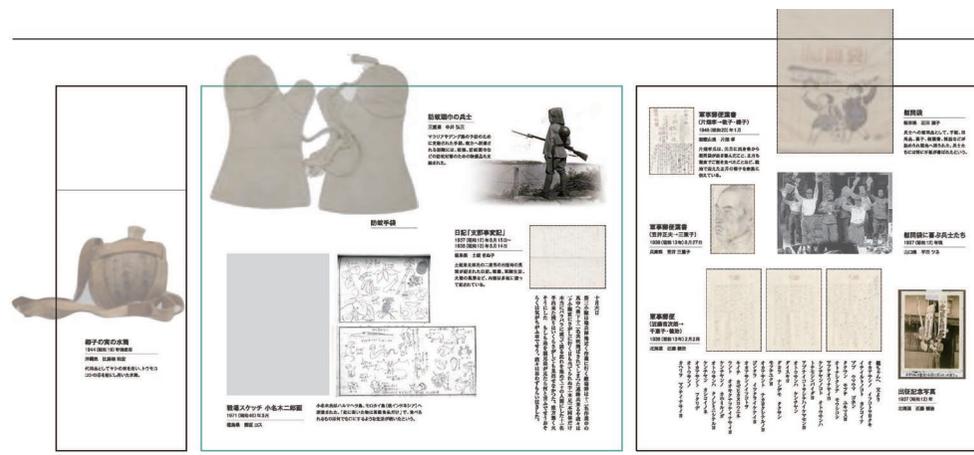
- ・ 地図（日本軍の最大進出域、主要な戦場）
- ・ 異国に広がる戦地について
- ・ 陸海軍の兵種と役割
- ・ 兵士たちの生活
- ・ 飯盒の解説

■ 展示資料

- ・ 慰問袋
- ・ 軍事郵便葉書
- ・ 子供にあてた軍事郵便
- ・ 防蚊手袋
- ・ 戦場スケッチ
- ・ 日記
- ・ 飯盒
- ・ 椰子の実の水筒



戦地での生活
 故郷を思いながら
 Life in the war zone,
 thinking of home.
 日本から遠く離れた海外の戦地。
 行軍と宿営を繰り返す毎日。
 そこには異国の地で養育を思い、
 生活する兵士たちの日常がありました。



W270-H750

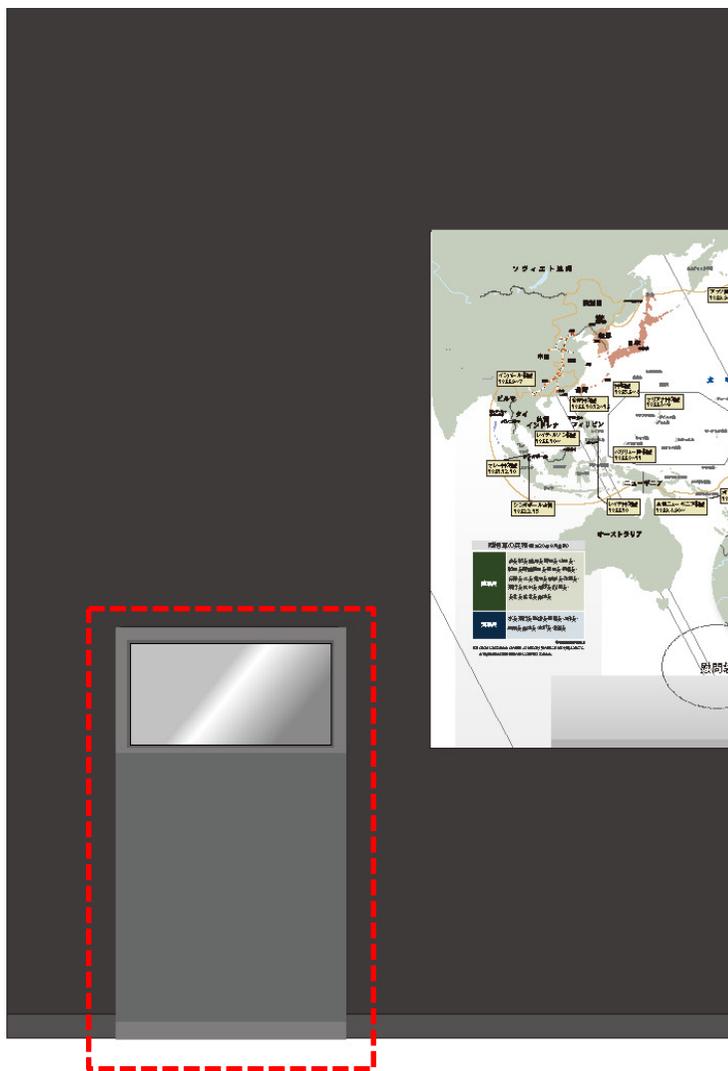
W870-H750 (新)

W720-H750

III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」 7-9. 選択型解説ディスプレイ映像展開

■ 展開例（2. 戦地に向けて）

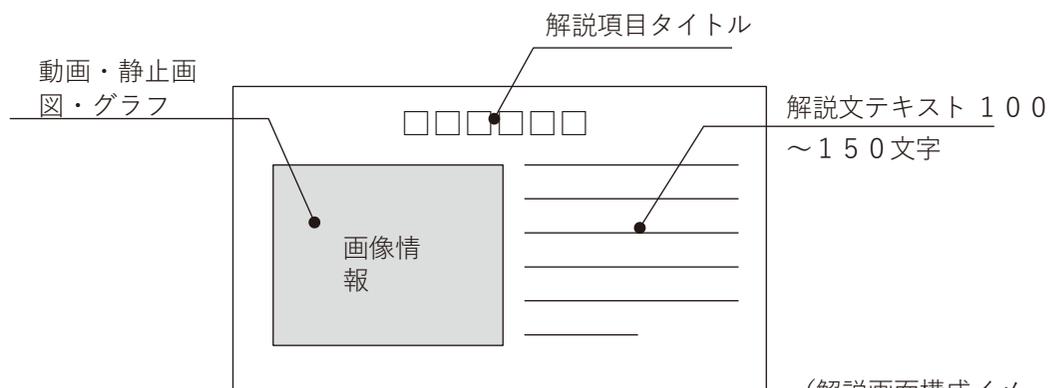


提供情報

- 来館者のさらなる興味や関心に答える詳細情報
- 各コーナーの資料展示では解説しきれない情報

展示手法

- 19インチタッチパネルディスプレイ
- 常設展示室内に6か所設置
- 解説は各コーナーごとに10項目以内
- 解説1項目1画面、画像情報と100~150文字程度の解説文、記録映像（動画）、写真・静止画、図表等で構成



III. 展示構成について

7. 常設展示室 コーナー展開「戦地に向けて」

7-10. めくり証言台及び軍装品

■ 展示概要

当時の出征兵士の軍装品と共に、各コーナーに関する証言をめくることができる展示。

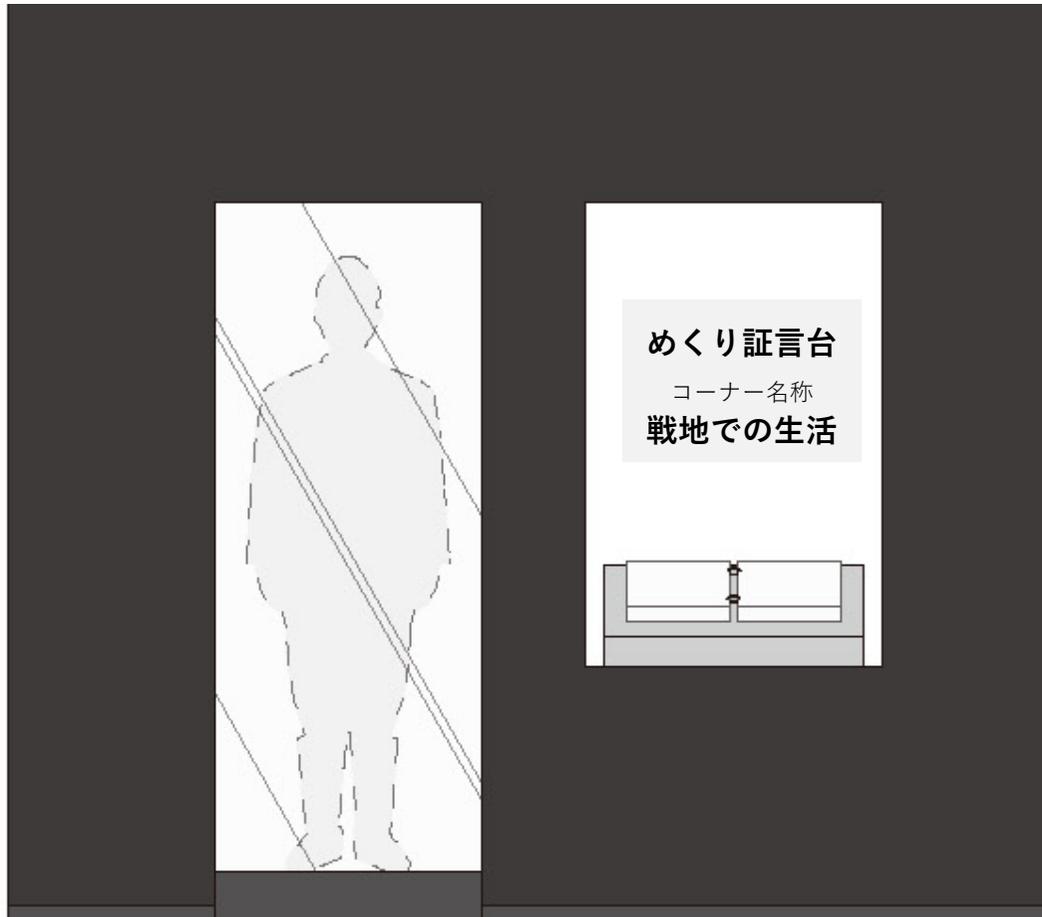
■ 展示項目

- ・ 出征兵士の軍装品解説
- ・ 証言

■ 展示資料

- ・ 出征兵士の軍装品
- ・ 証言のめくりパネル

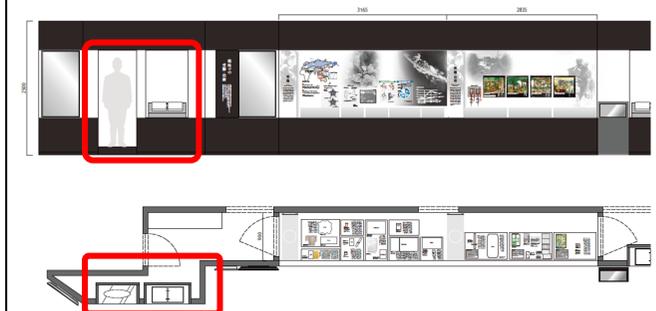
■ 展示展開



展示構成



立面・平面



III. 展示構成について

8. 常設展示室 その他のコーナーガイドンス映像展開

■ 各コーナーガイドンス概要

展示項目	概要
コーナーガイドンス② 3. 戦地での受難、治療	<p>受傷から治療と搬送、野戦病院での治療を紹介する。また、傷病兵の収容体系なども紹介する。</p> <p>ある兵士の手記「野戦病院に移された。足の傷は、運ばれる途中にガス壊疽を発症しており、切り落とされることになった。野戦病院では麻酔などなく、身体を押さえつけられながら手術の激通に耐えた。」等。</p>
コーナーガイドンス③ 4. 搬送、戦時下の療養生活	<p>陸海軍病院での治療、リハビリの様子、傷痍軍人への援護政策、再就職支援、結婚斡旋等の国や社会の支えを紹介する。</p> <p>ある兵士の手記「負傷兵であふれる病院船に揺られている間に考えていたことは、故郷の家族は今どうしているのだろうか、片足を失ったわたしをどう見るのだろうかということだった…</p> <p>臨時東京第一陸軍病院で、治療、リハビリに励むこととなる。</p> <p>義足が合わず切断部の皮膚を痛める。早く社会復帰したいが合わない義足で歩行訓練がつらい…」等。</p>
コーナーガイドンス④ 5. 家族とともに	<p>戦傷病者の長い戦後の歩みには、それぞれにさまざまな労苦があり、それは現在に続いている等の状況を紹介する。</p> <p>ある兵士の手記「忘れもしない昭和二十年・1945年8月15日、戦争が終わった。</p> <p>敗戦の混乱の中、誰もが生きることになった。精一杯だった。</p> <p>恩給が停止され、国の支えを失った私も生きることになった。」等。</p>

Ⅲ. 展示構成について

8. 常設展示室 その他のコーナーガイドンス映像展開

【表示テキスト／各コーナー約1分】

対応コーナー	表示テキストイメージ
<p>コーナーガイドンス②</p> <p>【受傷】</p> <p>【救護・収容】</p> <p>【野戦病院】</p>	<p>あれは昭和十七年、戦地へ行ってからちょうど1年経った頃だった。夜襲命令が下り突撃したわたしの右太ももを、敵が放った銃弾が貫いた。焼けるような味わったことのない痛みと衝撃で倒れてしまった…</p> <p>薄れゆく意識の中で、衛生兵にはげまされながら応急止血をしてもらったようだ。翌朝には繃帯所に運ばれた。</p> <p>野戦病院に移された。足の傷は、運ばれる途中にガス壊疽を発症しており、切り落とされることになった。野戦病院では麻酔などなく、身体を押さえつけられながら手術の激通に耐えた。</p>
<p>コーナーガイドンス③</p> <p>【搬送】</p> <p>【病院船】</p> <p>【戦時下の療養生活】</p> <p>【退院後の社会復帰】</p>	<p>やがて、本土へ送り返されることが決まった。戦地で戦っている戦友の姿が頭をよぎる。この足では役には立たないが、帰っていいのだろうか…</p> <p>負傷兵であふれる病院船に揺られている間に考えていたことは、故郷の家族は今どうしているのだろうか、片足を失ったわたしをどう見るのだろうかということだった…</p> <p>臨時東京第一陸軍病院で、治療、リハビリに励むこととなる。義足が合わず切断部の皮膚を痛める。早く社会復帰したいが合わない義足で歩行訓練が辛い…</p> <p>退院とともに除隊となり、恩賜の義足、鉄脚、軍人傷痕記章を受け取った。生きて再び故郷の土を踏んだ。実家の農業を手伝うことにした。見合い結婚し、子宝にも恵まれた。</p>

Ⅲ.展示構成について

8. 常設展示室 その他のコーナーガイドンス映像展開

【表示テキスト／各コーナー約1分】

対応コーナー	表示テキストイメージ
<p>コーナーガイドンス④ 【生活の困窮】</p> <p>【傷病とともに生きる】</p> <p>【ともにのりこえて】</p>	<p>忘れもしない昭和二十年・1945年8月15日、戦争が終わった。 敗戦の混乱の中、誰もが生きることには精一杯だった。 恩給が停止され、国の支えを失った私も生きることには必死だった。</p> <p>病気で入院している戦友を見舞った帰り、街頭の白衣募金者に見覚えのある顔を見つけた。 生活は苦しいが片足の不自由を補うために借金をしてトラクターを購入した。 後遺症にはまだ悩まされている。妻が支えてくれなかったら耐えられなかっただろう。</p> <p>かって戦争があった。今の日本にはその面影はない。だからこそ伝えたい。 戦争は、ひとたび起きると敵も味方も等しく多くの兵士が傷つき、 本人も家族も大変な苦勞をすることになることを。</p>

Ⅲ. 展示構成について

9. 戦傷病者労苦体験展示

■ 1 - 1. 体験内容

戦傷病者の労苦を体験的に知る体験展示は、設備規模、運営等の条件を設定しなければ様々な内容が想定される。

a. 受傷体験

a-1. 戦地環境体験

- ・戦地での戦闘状況の環境再現など。

暑さや寒さの中、轟く爆音など極限状態となる受傷や戦闘の再現などの環境体験温度、音、風などの環境を再現した野戦病院のシミュレーション体験など。

a-2. 兵士装備体験

- ・何十キロにもなる軍装品を背負って、日夜延々と続く過酷な進軍を行う情報を伝えるため、相当の重量のリュックサックを背負ってみるといった体験など。

a-3. 受傷時状況体験

- ・例えば、南方ジャングルの夜の戦闘時に受傷（銃創）した状況を、HMD（頭部装着ディスプレイ）を被りVR映像で仮想体験する。

b. 戦傷病者体験

b-1. キャップハンディ体験

- ・手足におもりをつけて歩いてみたり、暗闇の中を杖を頼りに歩いたりする体験。

b-2. 作業体験

- ・作業用義手（健常者体験用）などを使って、単純な作業が如何に困難かを体験。

b-3. 装備体験

- ・当時の義肢などの重さなどを実際に持ってみることにより、それに続く、義肢訓練から日々の生活の労苦に思いを馳せる体験。

Ⅲ. 展示構成について

9. 戦傷病者労苦体験展示

■ 1 - 2. 今回の施設での設置条件

・今回の移転条件や、館の運営予算等から体験展示を導入する場合の設置条件を検討した。

【体験展示設置条件】

① 運営要員の対応なしで展示・実施できること

(※企画展等で一定期間イベント的に実施する場合は、要員配置が可能だが、常設展示においては対応要員を常勤化することは困難)

② 「身体障害者」の労苦ではなく、「先の大戦の戦傷病者等」の労苦に繋がる内容であること。

③ ごく限られたスペースで実施可能であること

④ 小学校高学年から高齢者まで体験可能であること

■ 1 - 3. 体験展示の種別

・上記の設置条件から常設型体験展示の条件を整理した。

① 体験者の移動を伴う体験は不可

② 係員の補助を必要とする体験は不可

③ 固定されていない装備品などを身体に装着して行う体験は困難

④ 体験ツールが体験後に自動的にリセットできない仕組みは不可（係員が体験毎にツールを元の位置に戻すなどはできない）

⑤ 小学校高学年から高齢者まで安全に簡易に体験できる内容であること

⑥ 戦傷病者の労苦を直接的に体験できなくとも、その労苦の一端を想像しやすい体験であること

Ⅲ.展示構成について

9. 戦傷病者労苦体験展示

1-4. 体験内容

上記の評価に基づき、当該施設・条件で実行可能な体験内容を検討したところ、2種の体験展示に絞られ、各々評価した。

【プランA】 簡易的な能動義手を使用した単純作業体験（マジックハンド体験）

- ・ イベントでは既に実施しているが、マジックハンドのような簡易的な義手を制作し豆などをつかんでみる体験。
- ・ 自身の手では簡単な作業も、義肢などの道具を利用した場合は困難になることを体験。



- ・ 要員の補助がないと自由度の低い装置にしかならない。（ある程度固定した義手と、リセットが必要な動作）
- ・ そもそも能動義手の操作と、マジックハンド的体験道具では機能が大きく異なり正しい理解促進にならない可能性がある。
- ・ 小学生向けの極めて単純化したゲーム的体験としては良いが、来館者の多くは中学生以上であり、主要来館者層と体験で得られる理解に乖離がある。

【プランB】 当時の義肢（義手・義足）を手に取って重さなどを実感し、義肢を使った生活の大変さを想像する体験 （触れる当時の義肢〔レプリカ〕体験）



- ・ 体験のレベルは当時の義肢（レプリカ）に触れることにより得られる重さや視覚的実感に留まるため、体験のレベルとしては低いものの、戦傷病者の労苦を想像する道具としては正しいアプローチといえる。
- ・ 設置条件を満すための細工はそれほど必要はなく、来館者の主要層に対して無理や誤解を抱かせない体験内容となっている。

上記の検討よりプランBの「触れる当時の義肢（レプリカ）体験」を採用した。

Ⅲ. 展示構成について

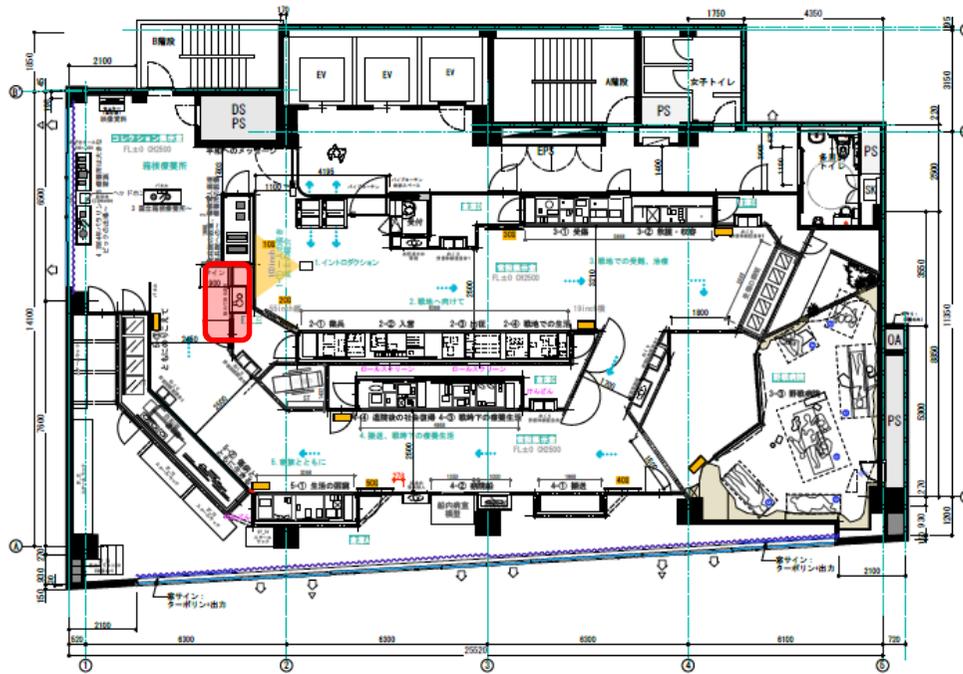
9. 戦傷病者労苦体験展示

1-5. 設置場所

・義肢は当館の展示を象徴するものであると言えるが、「戦傷病者等が経験した戦中・戦後の労苦」の理解なしに、その労苦の象徴である義肢を活用した体験展示を正しく理解してもらうことはできない。

従って、この体験展示が設置される場所としては、常設展示室の一連の流れの最後辺りに位置付けるのが適切と考える。

(※館の正面入り口(2階)部分に、同様に義肢をディスプレイし、当館の象徴的アイテムとしての意識付けも検討している。)



III. 展示構成について

10. 映像情報コンテンツ 団体見学用オリエンテーション映像

【コンセプト】

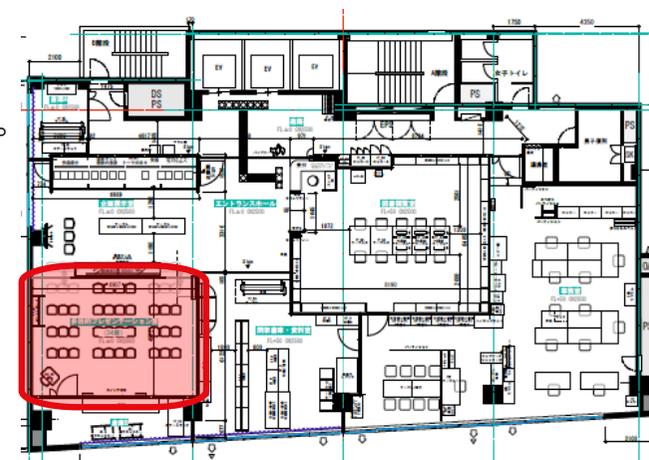
- ・ 団体見学者へ向け、学芸員の解説を補足するため「日中戦争～太平洋戦争」の概略を紹介する映像。日本の状況とアジア・太平洋の地図で日本軍の進軍状況を解説する。
- ・ 団体見学者は3Fエントランスに溜めてイントロダクション映像を見せる事が難しい。しかし団体以外の見学者と異なる展示体験とならないよう、3Fで上映するイントロダクション映像と同じものを視聴してもらってから3Fに移動してもらう。

【概要】

- ・ 当時の世界や日本の社会状況を解説し、実際にいつどこへ日本軍が進軍したのかを地図などを使い解説する。
- ・ 中高生が視聴することを前提として、伝えるべき要点を集約。

【演出プラン】

- ・ 横スクロールの年表が現れ、客観的に歴史の流れに沿って要点を解説する。
- ・ 国内や日中戦争・太平洋戦争の静止画像だけではなく、**地図で日本の戦線が広がっていく状況をビジュアルで理解**できるような表現。また、**アイコンやイラストなども使用**し、中高生が解説をより理解しやすいように工夫する。



1945	1944	1943	1942	1941	1940	1939	1938	1937	
ポツダム宣言受諾	広島長崎に原爆投下	サイパン島陥落 日本本土空襲	ガダルカナル島撤退 学徒出陣	ミッドウェイ海戦	真珠湾攻撃	日独伊三国軍事同盟締結 大政翼賛会結成	日米通商航海条約廃棄通告 第二次世界大戦開戦	ノモンハン事件 国家総動員法布告	盧溝橋事件 第二次上海事変 国民精神総動員運動発足



※ナレーションの内容に沿って進攻線が変化していく

III. 展示構成について

10. 映像情報コンテンツ 団体見学用オリエンテーション映像 【シナリオ案／約5分】

- 日本は1931年に満洲事変を起こし、中国東北部に満洲国を擁立し、ついで華北地域に攻め込んで傀儡政権を擁立するなど、武力によって勢力の拡大をめざす政策を押し進めるようになります。満洲国の擁立は国際連盟によって不当とされ、日本は1933年に国際連盟を脱退し、国際的孤立の道を歩み出します。
- 1937年7月に北京近郊で起きた日中両軍の衝突「盧溝橋事件」をきっかけとして日中戦争が始まります。日本は華北に大兵力を派遣し、さらに上海でも戦闘がおこり、戦火は南方に拡大し全面戦争化しました。
- 中国では、9月に国民党と共産党が提携して「抗日民族統一戦線」を結成し、抗戦体制を固めていき、華北から鉄道沿いに南下してくる日本軍に頑強に抵抗しました。日本軍は、12月には中華民国の首都である南京を占領しました。国民政府は首都を重慶に移し、イギリス、アメリカの支援を受けて戦争を継続しました。
- 日本国内では、政府は各界に〈挙国一致〉を求め、国民精神総動員運動を開始（1937年9月）し、国民の戦争協力体制を構築していきます。翌年には国家総動員法も制定されました。
- 日中戦争は1938年末ごろには膠着状態となります。日本が占領した地域には傀儡政権がつくられます。それを統合して1940年にできたのが、首都を南京とする新国民政府でした。長く続く戦争は、両国の兵士だけでなく、現地の住民をも傷つけることになりました。
- 第2次近衛文麿内閣は、1938年暮れに戦争の目的が日本・満洲・中国による東亜新秩序と経済圏の建設であることを声明します。これをアメリカは、自由貿易への挑戦とみなし、また日本のドイツへの接近に反発して、1939年7月に日米通商航海条約の廃棄を通告してきました（1940年1月廃棄）。
- 1939年5月に、日本軍が占領している満洲とソビエト連邦の国境地帯で、両国軍が武力衝突したノモンハン事件が発生しました。
- 1939年9月、ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まります。1940年4月ドイツは電撃戦によってデンマークとノルウェーを占領し、西方では5月にベルギーが、6月にはフランスが降伏しました。
- 日本軍は、1940年9月にフランス支配下にあった北部仏印に進駐し、続いて同月27日に「日独伊三国軍事同盟」を調印し、連合国側との対立を深めていきます。アメリカは航空機用ガソリンおよび屑鉄の対日輸出を禁止する経済制裁を発動しました。さらに日本が1941年7月に南部仏印進駐を行い東南アジアへの侵攻姿勢をいっそう強めると、在米日本資産凍結、石油輸出の全面禁止など、アメリカは制裁を強化します。
- 1941年に行われた日米間の交渉で、アメリカは中国本土から日本軍の撤退や三国同盟からの脱退を求め、重要資源のほとんどをアメリカに依存する日本は経済制裁の解除を望みましたが、しかし交渉はまとまりませんでした。
- 1941年（昭和16）12月8日、日本の真珠湾攻撃によって日本はアメリカ、イギリス、そして石油資源のある蘭領東インドを支配していたオランダに宣戦布告します。
- 当初は日本軍が優位で、太平洋・東南アジア地域に日本の占領地域が急速に拡大していきました。しかし、1942年のミッドウェー海戦で日本は大敗。アメリカ軍が太平洋においてしだいに優勢となり、1943年に日本軍がガダルカナル島から撤退すると攻勢に転じます。1944年7月に日本軍がサイパン島を失ったことで、アメリカの爆撃機B-29による日本本土の往復爆撃が可能となり、日本の全土に空襲が及ぶようになり、大きな被害が出るようになります。10月アメリカ軍はフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸しました。ここから日本海軍の特攻攻撃が始まります。
- 大陸方面では、日本軍はマレー半島やラオスを支配し、東南アジアから国への支援ルートを断つための戦いを行いましたが、インドをめざしたインパール作戦の敗北（1944年7月）により失敗に終わりました。
- 1945年5月ドイツが無条件降伏。6月には沖縄での日本軍の組織的な戦闘が終了しました。8月に広島・長崎へ原爆が投下され、前後してソ連による参戦もあり、日本はポツダム宣言を受諾して降伏、戦争は終結しました。

III. 展示構成について

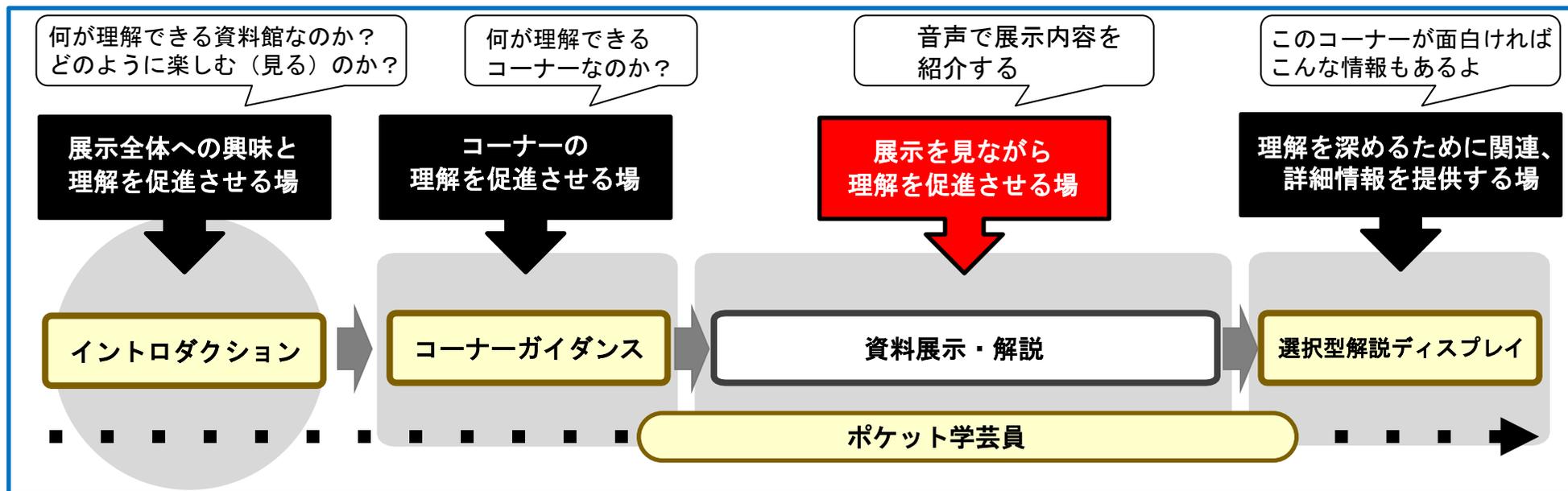
11. 映像情報コンテンツ スマートフォンを利用した展示解説

■ ポケット学芸員による展示解説

- ・ 手元の端末（スマートフォンや貸出端末）で詳細な展示解説を（画面情報）を閲覧したり、音声ガイドを聞くことができる。
- ・ 展示コーナーの各所に記されたコードを打ち込むことで、展示解説や音声呼び出すことができる。
- ・ 来館者は、アプリをダウンロードした自身のスマートフォンで閲覧することができ、退館後も振り返り情報を見る事ができる為より深い理解を得ることができる。
- ・ 来館者自身のスマートフォンを使用する為、従来の音声ガイドと違い、貸出・返却手続きといった運営負担を減らすことができる。

- ・ 高齢者などスマートフォンをもっていない来館者には、貸出用端末を用意する。

展示の中での位置づけ



音声ガイドとしての利便性だけでなく、展示へのより深い理解度を促す。

Ⅲ. 展示構成について

11. 映像情報コンテンツ スマートフォンを利用した展示解説

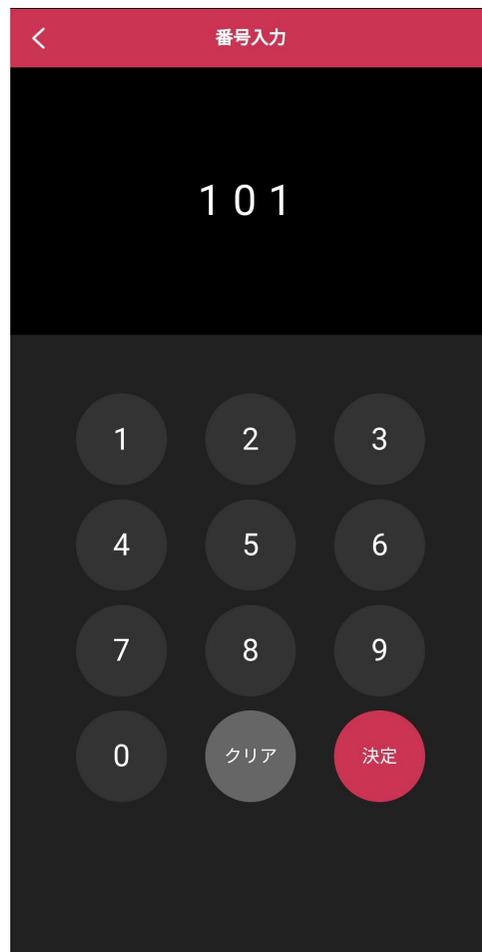
■ 使用イメージ

・施設トップ画面



館の概要と写真、ガイド画面とリスト画面を選択。

・コード入力画面



「ガイド」を選択すると入力画面へ、展示内に表示されているコードを打ち込む。

・解説画面



画像や解説テキスト。中央のスピーカーマークを押すと音声ガイダンスが再生。

・解説リスト



「リスト」を押すと展示解説一覧が表示される。退館後もここから振り返り閲覧が可能。

Ⅲ. 展示構成について

12. 映像情報コンテンツ ホームページ

■ 現状ホームページの課題点と対策

- ・ 度重なる改修により、検索ルートが複雑化してしまっており、目的のページにたどり着くのが難しい。
- ・ モバイル端末での閲覧に適していない。
- ・ 上部ツールバーと同階層にあるべきボタンが不足しており、ジャンルを越えたページ移動を行うには一度トップページを経由する必要がある。
- ・ 展示説明ページが簡単なエリア説明しか記載されていない為、内容がイメージしづらい。



- ◎ ルートおよび階層の整理し、わかりやすく目的ページに到達しやすい構成に再構築。
⇒ 初見のユーザーにも優しく見やすいページを作る。
- ◎ レスポンシブ化を意識したホームページ構成
⇒ デバイスを問わず、幅広い方に見てもらえるようなサイトにする。
- ◎ 実際の展示がイメージしやすい情報を入れる。
⇒ 来たい・より知りたいと思わせる構成を目指す。

III. 展示構成について

12. 映像情報コンテンツ ホームページ

■ PC閲覧画面構成イメージ



■ モバイル閲覧画面構成イメージ

